
龍神記

ビール腹男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍神記

【Nコード】

N7515Q

【作者名】

ビール腹男爵

【あらすじ】

ゲーム好きの大学生、佐伯翔の人生は唐突に終わりを告げた。次元の裂け目に魂を落とされた翔に救済の道を示す造物主に対して、彼はある提案をもちかけた。

それは、ドラゴンになる事。

願望が叶ったと喜ぶ彼は第二の生をどのように歩むのだろうか。

Caution!! この小説の作者は初執筆・初投稿でプロットも皆無、語彙力も乏しく、その上転生物・あまり悪用しないとは

いえ最強（に近い）物です。それでもよろしいとおっしゃる方、どうぞこちらへ。

プロローグ（前書き）

初めまして、よろしくお願ひします。

あらずじにも書きました。が、初執筆・初投稿の上お世辞にも文章力があるとは言えないです。ですが、コツコツ投稿を続けて読者の皆さんに楽しんでもらえる物を書いて行きたいと思ひます。

批判・批評・ご意見などありましたら気軽にコメント頂けたらと思ひます。

プロローグ

地面を削る轟音と共に、巨龍の尾が青年が掲げた大剣を薙ぐ。盾として使われた赤く輝く大剣は、おろし金の如き龍の皮甲の一撃を浴びながらも折れる事無く使い手の身を守り抜いた。

「グオオオオオオオ！！」

尾の一撃を凌いで後ずさる青年に向け、龍が地を揺るがす咆哮を上げる。大剣が、武具が、そして青年自身の体がビリビリとその衝撃波に揺らぐ。常人ならばその圧力だけで失神するであろう雄叫びを受けてなお、彼は身の丈を越す大剣を振り上げ龍の前肢を切断せんと肉薄する。

「ツハアツ！」

肺腑から搾り出すような裂帛の気合と共に、龍の右前肢に大剣が激突する。彼が振るうこの大剣は、研ぎ澄まされた切れ味で切るといった類の物ではなく、その驚異的な重量を持って叩き潰す様に使う。人類が振るい得るとは到底信じがたい質量を持って、大剣は龍の分厚い装甲をも押し潰して確かにその脚を抉り、その巨軀を揺るがした。

「ギャオオオオオオ！！」

四肢の1つを使い物にならない程に潰された龍が、苦悶の叫びを上げる。

その瞬間、龍の体1つ分ほど離れた位置に立つ、壮麗な翡翠色の

鎧に身を包んだ女戦士がこれも巨大な弓を限界まで引き絞り、撃ち放つ。複雑かつ美しく組上げられた複合弓から放たれた矢は如何なる術理か、瞬時に4本に分身し次々と龍の頭部に吸い込まれて行く。鏃が埋没するまでしかと喰い込んだ4本の矢の1本は、数少ない弱点であろう龍の眼球を食い破っていた。

さしもの巨龍もこれには悶絶し、どう、と倒れこむ。左目を潰され悶え苦しむ龍のがら空きの頸部に向かって、青年剣士の振り上げた巨大剣が断頭台の刃の如く、振り下ろされた…。



「あぶねー、ギリギリだったけど何とか死なずに倒せたな」

「翔が全体回復使ってくれて助かったわー。2ミリくらいしかライフ残ってなかったからな」

とある大学の講堂の隅で、2人の青年が携帯ゲーム機をつき合わせながら話している。2人の手元にあるゲーム機の画面では、大剣を背に下げた青年と、弓を折りたたんだ女戦士が龍の屍から武具の素材となる皮や爪、臓器を剥ぎ取っている。

「あそこで死なれると俺集中攻撃されるからなあ。時間も押してたし。ほら後10分で講義始まるぞ」

翔と呼ばれた青年が一緒にプレイしていた友人に告げると、彼は腕時計を見た後、そそくさとゲーム機の電源を落とし鞆に仕舞い込んで言う。

「あれだな。大体このゲームも完全クリアに近いなあ。お前とやってると殆ど死なないしな」

「まーな。初代からやりこんでるしな…。でもそろそろモンスター側になってプレイしたいわ。挑んで来るハンターと戦いながら自分を強化していくみたいなヤツ」

翔は苦笑して答える。やり込むタイプのゲーマーである翔は、殆どの敵モンスターの弱点や動きを知り独自の回避パターンを作り出しているためかなりの腕前を誇る。しかし、このシリーズももう息が長く、流石に最近では飽きが来てしまっていた。そんな彼は最近よく夢想する。

モンスター側になりたい。

彼は無類のモンスター好きである。しかもドラゴンや魔獣といった、到底人智の及ばぬような強大な、天災と呼んでもいい存在を好む。愛しているといってもいい。そんな彼は、強大な力を持つ魔獣となつて、敵である人類と戦いながら自らの力を鍛え上げていく、そんなゲームを心から望んでいた。

だが、これが意外と無い。流行らないのか、海外産、所謂『洋ゲー』まで探しても殆ど見つからない。いつその事自分で作りたいと思うくらいに無かった。

「お前のその台詞は今回で17回目だわ。もういつその事ゲーム会社に就職しちまえ。それで作れ。俺テストプレイヤーやったるから」

律儀にも数えていたらしく、友人は茶化しながら鞆を背負う。自身も相当なゲーマーである彼にしてみれば、翔がたまに思いつく奇想天外な発想―土木工事で魔王を倒すアクションゲームだとか、惑星を丸ごと改造するシュミレーションだとか―は十分斬新で面白いゲームに仕上がると思えるのだ。もっとも一人で作れる訳も無いから、企画立案としてゲーム会社に就職しなければならぬが。

「そんな上手く行く訳無いだろ…。俺の思いつくのはニッチな物ばかりだし。採算取れないよ。というかまず就職できない。…あ、俺もバイトがあるから、そろそろ行くわ。」

「今日もバイトかあ。10時までやっけ？終わったら遊び行っている？明日フリーやろ」

お互い大学の近くに下宿、しかも同じマンションである。日常的に部屋に上がりこんでは酒をちびちびやりながらゲームをする。そんな日々が続いていた。

「あいよ。んじゃまた夜に」
「おう。お疲れー」

気安く言葉を交わしながら、講堂を出て2人は分かれて歩いてゆく。

（酒もうすぐ無くなるんじゃないか？あいつペース速いからなあ。まあ持ってくるだろ…）

などと考えながら翔はアルバイト先の小さな工具店に急ぐ。

彼の中では、明日の昼ごろまでだらだらとした時間を過ごす未来

の予定が既に出来上がっていた。

彼の中では。



アルバイトを終えて、翔はすぐ近くにある下宿先へと歩いていった。

バイト先は個人経営の工具店で、元々は70をとうに超えた老人が一人で店主兼店員をやっていた。下宿に引っ越して近くでバイト先を探したところ、この辺りでは中々の給料で募集していたため扉を叩いたら即日採用となって早2年半。学生街、即ちバイト激戦区の中で好条件で雇ってもらえた事は、学費を奨学金とアルバイトの収入に頼る彼にとっては僥倖と言えた。

（あの爺さんの与太話は面白いし、為になる話も多いからな。雑学好きとしては暇する事も無いし、今日の話も面白かった）

ちなみに今日の老人の話題は、どこから持ってきたのか科学系の情報誌だった。特集が組まれていた、アメリカ軍のレーザー兵器が実験に成功したという話題を興奮気味に語る様子を見て、何歳になっても男という物はこういう話が好きなんだなと苦笑したものだ。

半ば話し相手を求めているバイト募集だったかの様に、客が居ても居なくても常に雑談している店長の事を考えつつ階段を上り、自分

の部屋の扉の前に立ってポケットを探った。

「あれ、鍵何処やったかな…」

ぶつぶつと独り言を言いながら靴を開けようとする翔の背後。マシヨンの廊下と扉だけが続いているはずの空間で、奇妙な現象が起こっていた。虚空が正方形に切り取られた様にぽっかりと口を開け、その内部は無限遠の彼方まで落ち込むように遠ざかっている。50センチ四方の空間に開いたその先は、拡大を停止した瞬間、燐光を放ち始めた。

靴の底、何故そこに入れたのか分からない場所に鍵の手触りを感じた瞬間、翔は体に異変を覚えた。全身が異様な脱力感を覚え、それと同時に背後に強く引き寄せられる。膝が、ガクリと落ちた。

「なっ…ああ…!？」

眩暈か貧血か、そういう事は今まで無かったのに。焦りを覚えるその瞬間にも、強引に引き倒される様な感覚に何とか後ろを振り返る。既に自室の扉に肩を預ける程に体勢を崩した彼が何とか視界の端に捕らえたものは、虚空に広がる底なしの孔だった。

(何が…)

その疑問を最後に、体がその孔に引きずり込まれる感覚と共に翔の意識は消失した。

尤も彼自身がそう感じただけであり、実際に引き込まれたのは所謂『魂』に相当する部分だけであった。

最重要の原動力を抜き取られた空の肉体は、水気の多いものが入

った袋を叩きつけた―ある意味その通りなのだが―様な音と共に廊下に倒れ伏し、地面に打ち付けられた頭部では、急速に瞳孔が開いて行った。

命が吸い出されてしまった翔の体は、今夜遊ぶ予定だった友人が酒の満載された袋を持って現れるまで、その場で急速に冷たくなっていた。

プロローグ（後書き）

彼らがプレイしていたゲームはもちろん『モ○ハン』です（笑）

第1話 造物主（前書き）

感情表現や会話のやりとりに四苦八苦しています。まだ本編始まって無い状態なのに文字数が爆発しています。しかもネタかぶりは無いだろうと思って他の作者様の作品を拝見したら意外とかぶり気味。しかも当然ながら私より遥かに上手い。どうしよう…

第1話 造物主

自室の前で意識を失った翔は、覚えの無い場所で目を覚ました。

「う…すごいだるい…。なんだここ…。病院か？」

指一本動かす事すら億劫な程の虚脱感に苛まれながら目を薄く開けると、そこには継ぎ目ひとつ無い白い天井が続いていた。

（ぶっ倒れて病院に運ばれたのか…？結構重症だったんだな）

意識を失って廊下に倒れてしまい、誰かに救急車を呼ばれたんだろう。そう思いながら、首を倒して辺りを見回す。だが、そこに預期していた壁は無く、白い天井は遥か彼方まで続いていた。

病院だと思っていた翔は現実とは思えない光景に目を疑った。

「な、なんだここは…！？ 大体俺、床に寝てるじゃないか」

暖かく柔らかなベッドだと思っていた場所も純白の床であり、天井と同じく無限に続いていた。一瞬前まで、自分のベッドより厚みのある毛布とスプリングの様に感じていたはずなのに、今はひんやりとした硬質な感覚を背中に伝えてくる。その異様さに、翔は気だるさも忘れて半身を起こした。

水平に移り変わった視界は、今度こそ彼を狼狽させた。

「宇宙…！？」

目が痛くなるような純白の天井と床が消えてゆく先にあったもの

は、きらめく星々と深遠の宇宙だった。とても壁紙などと納得できない本物の宇宙空間が彼方に横たわっている。

(ここはまさか……)

異様な景色を見て、最悪の予想が脳裏をよぎった瞬間。

「お前の考えている通りだ」

「!!」

突然の声は背後から聞こえた。男のもととも女のもととも、老いているとも子供のものとも思えない、ただ圧倒的な質感を持った声。

驚愕に身を震わせた翔が振り返ったその先には一人の少年が居た。人種を特定できない白皙の美貌に燃える様な緋色の短髪をした10歳程に見える少年が、手に輝く水晶の様な球体を持ち、ソファに腰掛けている。体には古代ギリシャで使われていた様な布の服をまとっている。ソファの脚の周りには少年の手にあるものと同じ様な水晶球が無数に転がっていた。

慌てて口を開こうとする翔を空いている掌で遮り、少年はさらに言葉を続けた。

「私はタリエ。次元の造物主……お前たちの星では俗に『神』と呼ばれるものだ。お前には故あって此処に来てもらわなければならなかった。お前の疑問には答える。順を追って説明しよう。だから落ち着きなさい」

その声を聞かなければ子供の虚言と言われても仕方ない様な事を

平然と、尊大な態度で少年は言う。体の内側に響く様な圧迫感を与える声は自然と翔にうろたえる事を許さなかった。

「ああ…わかったよ。で、君…あなたは神様なのか。つまり俺は…」

「お前は聡い。端的に結論から言うと、お前の肉体は死した。それも自然のあるべき理の外でな。これを見ろ」

翔はなんとなく解ってしまっていた。無限の天井と床、その先の宇宙空間。人とは思えない、時代錯誤な格好をした少年。手の込んだ最高に性質の悪いジョークでも無い限り、ここは現実では有り得ない。呆然としながらも納得していると、神―造物主と言っていたが―が指した先の空間が正方形に切り取られた。その中は無限に落ち込んでいる。

意識を失った時を思い出し戦慄する翔の事など意に介さず、タリエは言葉を続ける。

「事の次第を説明するには、お前たちの世界の成り立ちから教えるくてはな。お前たちが居る世界、所謂宇宙だが…それはこの球のひとつに過ぎない」

そう言って片手の中にある水晶球を軽く掲げる。

「この掌にある球は所謂『お前たちの宇宙』だ。尤もお前たち人類だけが生きている訳ではもちろん無いが。この球を我々はひとつの次元と呼んでいる。この次元を生み出したのが私、つまり造物主であり、次元は多数存在する。私が今までに生み出した次元は316。私の元にある、これらの球はすべて我が次元という訳だ」

ソファの下に無造作に山積みになっている水晶球たちをさしてタリエは言う。1人の人間でしかない翔からしてみれば到底信じられない話ではあるものの、諦めに似た心境で疑問を飲み込む。こいつが言うならばそうなんだろうと強引に納得させるだけの力が目の前の少年にはあった。

「各次元の間は基本的には移動することも出来ないし、外に出ることも出来ない。何処の次元だったか：科学の進歩の結果、今までにただ一種族だけこの球から抜け出す業を編み出した者達が居たが。あれは痛快であったな。ま、それは良い。その次元の隔たりに最近：地球の時間で言うところ5年程前からある異変が起きていてな」

嬉しそうな表情から一転、そう言ってタリエは美貌を歪める。

「次元に断層が生まれておる。それも大量に。それがこの孔だ。私も事前に感知することが出来ない。生まれた断層をすぐに察知して修復することは出来るものの、それまでに何かを吸い込みよる。その殆どが何も無い宇宙空間に開くのだが、極稀に生命の居る惑星表面上に開いてしまうものがあってな：。知性体を吸い込むなど恐ろしい程の低確率だが。お前の場合、お前の次元では初めての知性体の被害者だ」

どうやら翔は宝くじも真っ青の確立で、神にすら対処不可能の災害の犠牲者となったようだ。どちらかというと運の無い人生を歩んできたのに、最後の最後でこの大当たりとは：いや運が無いからこそか。あまりの出来事に悲しみや怒りを通り越して苦笑いを浮かべてしまう。

「この断層の直撃を受けた結果、お前達で言うところの精神、

魂と言ったものが次元の狭間に吸い出されてしまったのだ。我が次元では初めての事態であった為、対処に困りお前を此処に呼んだというわけだ」

そう言葉を切ってタリエは断層の映像を消すと、少し姿勢を正して翔の瞳を覗き込んだ。刻々と色を変える不思議な瞳に見つめられ、少しうろたえながらもなんとか今までの説明を飲み込んで口を開く。

「ああ…大体状況はわかったよ。正直漫画みたいな話で現実感まったく無いけど、宇宙がこんな風になってたなんて感激だ。つまり俺は死んでしまつて、ここは天国みたいな場所なんだな。で、この後俺はどうなるんだ？」

まさか齡21にして宇宙の真実に触れるとは思わなかった。一周して落ち着いてしまったのか、普通に造物主と名乗る少年と会話すらしてしまっている。宗教家の妄想だと思っていた神に出会って口を利くなんて、もしかしなくてもこれは凄まじい超常体験では無いだろうか？静かに興奮しながら造物主タリエに問うと、少し言いづらそうに口を開いた。妙な所で人間臭い。

「お前の名は……ふむ、佐伯翔と言うのか。翔よ。お前には詫びとして2つの選択肢を与えたいと思う。他の次元に魂を移管して生をやり直すか、今までの次元、お前の星に魂を溶かし込み、転生を待つか選ぶがいい」

こいつは何を言っているのか。望めるならば元の生活に戻りたいに決まっている。

「いや、選択肢とかじゃなくて…普通に元の生活に戻してくれよ！やり直すとか転生とか誰が望むんだよ」

しかし。

「それは出来ない。我々には唯一つの盟約がある。それは『起きた事を書き換えない、時間を戻さない』という物だ。たとえば次元その物が崩壊を起こし消滅する様な事態が起きてもそれを巻き戻したり無かった事することは出来ない、してはならないのだ。今回の事は済まないと思うし、今後発生しない様に最善を尽くすつもりだ。造物主として謝罪する。しかし、お前を『生きていた』事にしてやることは出来ない」

そう言ってタリエは深々と頭を下げた。頭を下げるという文化は造物主ですら共通なのか。いやいやそういう問題じゃない。正真正銘の神に頭を下げさせるという事態に、小心者の翔はあたふたしてしまった。両手をわたわたと動かして頭を上げてくれと頼む。

いきなり死どころか魂を次元外に放り出されたというのにお人よし過ぎるとも言えるが。

「い、いや、頭を上げてくれよ。俺そんなに生き続けたい、なんてほど充実してた訳じゃないし。そりゃ死んだとなればちょっとは悲しいけど。泣いてくれるのもアイツくらいだし……」

もとに戻ることはできないと言われ瞬間激昂した翔だが、ごく冷静に考えるとそこまで何がなんでも戻りたい、と考えていない自分にふと気がついたのであった。

翔は幼い頃に両親が離婚し、母親について行ったは良いが再婚相手の継父に虐待された挙句、母の病死と共に放り出されている。祖母の財産とアルバイトで稼いだ金で大学までなんとか進学したもの

の、何か生きがいがある訳でもなく、どちらかと言うと世界に倦んでいた。内向的な性格もあって友人も少ない。

有り体に言って、彼にはあのままでも生き続ける程の原動力は無かった。

もちろん、少ないとは言え親しい友人も居た。あのまま部屋に帰って、上がりこんでくる友人と過ごす怠惰な時間も楽しかっただろう。でもあいつは友達多いし、俺が居なくてもすぐに立ち直るんじゃないかな。そう考えると、何か急に拘る気も無くなった。後は読みかけの漫画と大詰めで止まってるゲームくらいなものである。それこそどうでもいい。

「さすがに転生の順番待ちとか悲しいし、何より俺の居た世界はつまらなかった。どうせなら、他の世界：次元に行きたいかな。さっき我々って言ったよな？他の造物主も居ると思うんだけど、どんな所があるんだ？」

一度諦めてしまうと、予想以上に軽い気持ちになった。もともと熱にくい性格である。珍しく前向きに、翔は今後のことを考えた。

そんな翔を見てタリエは少し驚いたような表情になる。三日月のように薄く笑みを浮かべて彼は口を開いた。

「感謝する。そして認識を改めよう。翔の魂を走査した結果、後ろ向きかつ未熟な精神性を持っていると思っていたが、どうやらそれだけでは無いようだ。知の回転も早い。この場に至ってそれ程冷静である事もそれを物語っている」

さらりと失礼な事を言われた様な気がしたが、相手は超常の存在

だ。軽くスルーする。それに事実であることは彼自身が知っている。何より翔のこの態度は単に開き直っているだけだ。

「翔の考えどおり、私のような造物主は他にも存在する。それも無数に。つまり、次元も無数に存在するということだ。その中にはお前たちの娯楽作品で描かれる、魔法や魔術と呼ばれるものが存在する次元も多数あるぞ。私は『干渉せず鑑賞する』ものだから私の持つ次元には存在しないが、他の造物主の中には自らの力を次元の中に流しこんで居る者も多い。そうした次元では魔法がごく自然と存在する訳だ。翔はそうした作品が好きだった様だが、どうだ？ その様な次元に行くか？」

驚いたことに、ファンタジー世界というものはただの創作では無かった。造物主の力が魔力に相当するものの様だ。少し興奮しながら言う。

「ほんとか！ そういうのって想像の産物だと思ってたよ。現実にあるんだな…。行けるならそういう世界がいい」

「お前たちの種族は数々の知的生命体の中でも、ああ言った娯楽作品を生み出す文化では傑出しているな。まるで観てきたかのように描かれる世界は素晴らしい。存在する次元に酷似したものは特に人氣があつてな、私や他の造物主達もよく拝見させてもらっているよ」

まさか神々が人類の文化を知っていて楽しんでいるとは。意外と俗な方々なのかも知れない。この造物主も口調こそ堅苦しい様に感じるが結構フレンドリーだ。

「今回の事は私も想定外であり、非常に申し訳なく思っている故、どのような次元であっても望む力を与えて送り出そう。変化や恣意

的な操作を好む造物主ならば、喜んで迎え入れてくれるだろう。何か望むものはあるかな？」

いわゆる『チート能力』的なものも与えてくれるとの事だった。地球の文化に精通しているのならば、そういうものも知っているのだろうか。だが翔が望むものは別にあった。

「じゃあ、お言葉に甘えようかな。こういうのが大丈夫なのかはわからないけど……『ドラゴンになりたい』っていう望みはいけるか？ 知能が高くて強大な力を持っていて、誇り高く気高い。そういう存在になりたい。人類じゃないと駄目だとかあるのか？」

そう。翔がいつも思い描いていた、理想の存在。ある時は英雄の強大な敵となり、ある時は心強い盟友となる。何物にも縛られない、誇り高き天地の覇者。自らの分身として求めていた存在にもし本当になれるのならば、それ以上の喜びは無かった。

「ほう……。予想外の答えだな。龍になりたいとは。我が次元にも爬虫類から進化を遂げた知的生命体は多く居るが、そういう事なら他の造物主の次元にも数多居るぞ。天災の如きものから神と崇められるものまで千差万別ではあるが、お主の望む様な龍が居る次元はいくつもある。何せお前たちの娯楽作品を見て感銘を受けた造物主が態々創りだした次元もあることだしな。当然、人類でなければならぬなどとは言わぬよ。むしろお前たちと似通った種族を探す方が難しいのだからな」

「本当か！ やった、恩に着るよ。死んでしまった事なんかこれで全然気にならない。叶うはずの無かった願いが叶うんだから！」

最早翔の中に、突然訪れた最後を悲しむ感情は無かった。想像、

いや妄想の中でしか成し得なかった願いが成就するのだ。飛び上って喜びたいくらいだった。

「翔、お前は本当に不思議なものだな。今後もお主の新たな生を覗かせてもらい、私も楽しむ事としよう。お主の精神を走査し、最適な形態とそれに合致する次元を探そう……ふむ、見つけたぞ。オイジズという造物主とその配下が管理する次元のひとつに、最適なものを見つけた。湯水の如くにその力を注ぎこみ、攪拌して後は成りゆきを楽しむ存在だが、彼奴の次元群は翔の望みを叶えるものだ。ではそろそろ往こう」

そう言ってタリエがソファから立ち上がると同時にソファはふっと消滅した。いつの間にか出現していた巨大な鏡の様なものに向かって歩き出す彼に、翔は声をかける。

「なあ、最後に聞いていいか？」

「実体次元に肉体を持った後、ここで知った事を話しても世迷い事としか思われないだろうから、何でも聞くといい。何だ？」

翔にはどうしても気になる事があった。最早なんの意味も持たない質問ではあったが、ひねくれた所のある彼にとっては聞かずに居れない。

「タリエは俺達の世界の造物主……つまり神様に値するわけだけど。どこかの宗教の神様って事になるのか？神が人間の子供の見た目だなんて驚いたから……」

そう言った瞬間、タリエはこの短い付き合いの中で、最も大きく表情を変えた。つまり——爆笑した。

「はははははは！！さすが翔だ！本当にお前は面白い。…人類が創りだした宗教という価値観などの何にも値する訳が無いだろう。あれは統治と収益の独占の為に生み出された非常に独創的なシステムに過ぎない。次元は不可逆であるから、お前たちから私を認識することは本来不可能だしな。尤も私の名を勝手に騙り色々やっているのを見ると些か複雑な気分ではあるが。後、この姿は単に親しみを持てるだろうと考えて変化させているに過ぎない。私達に実体は存在しない故にな」

笑い転げる様は尊大とは言え普通の子どもに見えたが、やはり仮の姿の様だ。服装からも古代ギリシャ文明の神のようで、確かに虚空から声だけ聞こえたりするよりかは親近感を持てた。それに無神論者の翔の感じてきた、宗教者が語る神というものに対する猜疑心も正しかった様だ。せっかく神と遭遇するという奇跡を体験したのだから、この疑問は我慢できなかった。

「お前の考えは地球では正しかった。あの次元は私の力は存在しない。しかし、これから赴く次元はオイジズやその配下の影響力が強い。向こうの信仰は無意味というわけでは無いぞ。尤も神の奇跡などとは期待しない方が良いが」

「わかった。郷に入っては郷に従えって言うしな。色々ありがとうタリエ。興味深い話も聞けてうれしかったよ。また会えるのか？」

体感時間で数時間程度だったが、タリエとの出会いは非常に面白く感じたものだった。落ち着いた語り口も心地良く、少し別れるのが惜しまれた。

「私は次元に口出しする事は好まない故、再開は遠いだろうな。次

元断層の修復もある。だがお前は好ましい。翔の往く世界をオイジズに頼み覗かせてもらう事もあるだろう。…そうだな、お主が死して、魂となった時は、またここに呼ぶこととしよう」

タリエ達造物主も暇では無いのだろうし、流石にそこまで特別扱いを望むわけにも行かない。そう思い直す。既に十分特別扱いされているけれども。

「そうだな、いつになるかは解らないけど、その時はまたよろしくな。じゃあ、そろそろ行くよ」

言って鏡の前でタリエの手を握る。腹くらいの背丈の造物主は、永劫の時間を感じさせる柔和な笑顔を浮かべて翔を送り出した。

「ああ。興味深きものよ。さらば。また会う時まで」

瞬間、翔は光に包まれた。今度は、少しばかり安易な喜びと期待の中で。

第1話 造物主（後書き）

色々読んで改良を目指していますが、何より遅筆の極みなので更新は遅いかもしれません…。 批判・批評・ご意見などありましたら気軽にコメントください。ぜひ参考にさせていただきます。

第2話 新生（前書き）

やっと本筋の世界にたどり着きました。遅筆でごめんなさい。

第2話 新生

何か暖かなものが体を撫でてゆく。閉じたまぶたの向こうから僅かに光が差すものの、ひりつく様な痛みが襲ってきて目を開ける事はできなかった。

（体も動かない…頭も働かない…もう生まれ変わったんだよね…）

翔は何とか体をよじり、目を開けようとする。思うように動かない、恐らく生まれたばかりであろう体に比例して思考能力も低下しているのか、朦朧としていた。一刻も早く自分がどの様に变化したか確かめたいがそれもままならない。もどかしく思うまま暖かいものに包まれ撫でられる彼の心に、慈愛を感じさせる優しい声が響いた。

『我と天地の祝福を受けて生まれし鱗柔らかき幼子よ、眼を開けよ。世界がそなたを祝福している』

呆としていた意識を揺り動かした声に翔は驚いた。ようやくその機能を果たし始めた耳には、風鳴りの柔らかな音と木々のざわめきのみが聞こえてくる。この声は直接心の中に響いているのだった。

（あなたは…だれだ？）

『おお…健やかなりし仔よ。生まれて直ぐに念話に答えることができるとは。そなたは実に強き龍となろうぞ。我はそなたの母』

（母さん？）

体の奥底に、火花の様な感覚がわだかまっていた。じりじりと内側から焦がす様な力が押し上げて早く眼を開け、体を動かせと急かしていた。

『幼子よ、そなたの裡に猛々しくも優しい力の胎動を感じるぞ。心地よい。母は此処に居る。安心するがいい』

凜然とした気高さと優しさを感じさせる声はこの世界での新しき母の声だった。状況が概ねつかめて来た。彼はどうやら生まれたばかりであり、母龍が傍に居るようだ。

ようやく眼の奥に感じる痛みも収まってきていた。前世でどうだったかは当然ながら覚えて居なかったが、初めて感じる光だ。慣れが必要なのだろう。うつすらとまぶたを上げる。

初めて眼に飛び込んできたものは黄金に輝く大きな龍の姿だった。胴体半ばから後は見えないが、前脚を折りたたみ、長い首をもたげてこちらを覗き込んでいる。長大な2本の角が生えた精悍さを感じさせる鋭角的な頭部に、金の中に紅い血の色を溶かし込んだような爛々と輝く瞳がこちらを見ていた。剣の様な鋭い牙が並ぶ口が開かれ、赤い舌にぞろりと顔を舐められた。先ほどから翔が感じていた暖かなものは母の舌だった様だ。大きく頭の上を横切る輝きは翼だろうか。

(きれい…母さん…)

自ら望んだ事とはいえ、現実として目の前に自分の母となった龍が居る。その圧倒的な存在感に体が震えた。恐怖ではなく歓喜に。母龍の姿を呆然と眺めてから、翔は自分の体はどうなっているのかと視点を移した。元の手の感覚に近い前脚を少し動かしてみる。母

龍の鋭い、何者をもつてしても貫けまいと思える強固な鱗とは違い、滑らかなくすんだ金色の鱗を纏った細い足が目の前に2本あった。指は4本で、内1本は親指の様に残りの指と相對して生えている。指先には生まれたばかりとは思えない、鋭い鉤爪がある。

今までの人間としての自分との差異に戸惑うかと思ったが、見事に順応していた。元からそうであったとしか思えない自然な感覚で指を折り、力を込めて体の下に敷かれていた草をつかむことが出来た。

体の裡の火花が、より一層強く燃え上がり、肉体から溢れそうになる。

(熱い)

突き動かされる様に、四肢に力を込めて立ち上がる。後脚は眼で見て確認しては居なかったが、前脚と似たようにより力強い感覚を返してくる。人でいう足に近い感覚である。尻の先からは尾と思しき反応もあり、これも無意識に動かすことが出来るのだろう。殆ど動かせなかったが背に翼も感じた。

生まれたばかりの四肢は震え、満足に動かすには至らなかったものの、何とか踏ん張って立ち上がる。同時に、半眼に開いていたまぶたも大きく開いた。

母龍はそんな仔を見て僅かに驚いたように眼を見開いた。この種の龍に天敵など居ない。同等の強さを持つものはいくつか居るがすべて種族違いの龍であり、彼らは皆広い縄張りを持っている。生まれたばかりの仔龍を襲う脅威など天災以外に存在しない。それ故、龍は生まれたばかりで動こうと必死になることなど無いのだ。悠然

と数日かけて体を動かし始めるのが当然と母龍は考えていた。恐らく自分が生まれた時も――もう1500年ほど昔の事だが――そうであったはずだ。

『幼子よ、何かを恐れて直ぐに立つ事はない。ゆるりと体を慣らすがいい。そなたを襲うものなど居らぬ』

母龍がいたわる様に心に語りかけてくる。しかし翔は、裡から身を焦がす火花によって急かされる様に衝動的に立ち上がったのだ。心に念じて母に答える。

『そうじゃないんです。体が中から熱くて、早く立ち上がりたくて……』

そう言った途端、母龍は洞窟が震える程に咆哮した。喜色をにじませるその咆哮にびくりと身を竦める翔だったが、構わず母龍は目を細め翔の顔を舐め上げた。

『素晴らしきかな、強き仔よ。そなたはいずれ始祖に負けるとも劣らぬ力ある龍となろう。偉大なる始祖、空の黄金と謳われたバルデイラックⅡアルゴルの名を頂いて名を与えよう。そなたの名はデイラック』

名を授けられた刹那、体の裡から溢れんばかりだった火花が、炸裂した。かつて人間『佐伯翔』であった龍、デイラックはこみ上げる衝動のままに首をもたげ、遠く高く初めての咆哮をあげた。



黄金の幼き龍が名を受けた直後。遠く離れた地にある王城の中が急に慌しくなった。

広い執務室で書類を片手に数人の臣下と話しこんでいるのは齡60前後と見える男である。昔は見事な金色だったであろう頭髪は殆どが白く染まり、生え際も頭頂部に差し掛かってその重責を伺わせる。その容貌には年月と不摂生によって、深い皺と隈が溜め込まれていた。豪華な装飾が施された長衣の下、大柄な体軀はどこも見事に垂れ下がった贅肉に包まれている。

彼が税務を担当する文官に羊皮紙の束を叩き付けた直後、分厚い檜の木で作られた執務室の扉が控えめにノックされた。

「執務中の所まことに申し訳ございません。教区神官長クイズリー様が至急お伝えしたい事があると登城されました。迎賓の間にお通ししましたが、如何致しますか」

警護についていた近衛兵とは別の落ち着いた声に、男は眉間の皺を一際深くしながら答える。大陸最大の宗教である『オージス神智教』の神官、しかも王都の神殿で最も位階の高いクイズリーの訪問とあっては無下には出来ない。

「クイズリーだど？…ここに呼べ。お前達は下がれ、用が済めば続きを行うゆえ隣室に控えよ」

「は」

答えて文官達が一礼し退室すると、程なく先ほどの声の主と共に老人が入室してくる。

執務室の主よりも一層老いて見える骸骨の様なその老人は莊重な白と青のローブを引きずるように歩み寄り、寶石で飾られた司祭帽を取り深く一礼すると普段の媚びた態度もそこそこの男に話しかけた。

「これはカムロン王、ご機嫌麗しく…。火急のご報告が必要となりましたため、手続きを踏む事無く登城した非礼をお許しく下さい」

「早春の祭祀の予定は10日後であつたはずだが、余の勘違いであつたかな？ 神殿とは違い我等は忙しい。火急の用事とは執務を邪魔するほどの事なのだろうな」

カムロン王と呼ばれた男は頬を歪めて神官を嘲るが、嘲られた当人は意にも介さず報告を始める。その額には一筋の汗が流れ、老人の焦りを物語っていた。

「は。王はルブスの南に広がる魔の森を御記憶でしょうか。その更に南の天剣山脈で今朝方、爆発的な魔力の放射が確認されました」

王の眦は『魔の森』と聞いた瞬間に跳ねていたが、神官の言葉が終わる頃には一気に危険な角度にまで吊りあがった。

「御記憶かだと？ あの森と魔獣共のお陰でル布斯以南は十年は開発が止まっておるわ。忘れられる物なら忘れたいくらいだ。で、此度は何だ？ 魔晶石鉱脈でも臨界に達したか？」

天然の魔晶石鉱脈は例えるなら溶岩溜まりの様な物である。地下のマグマが圧力の限界を迎えると噴火するように、魔力がこれ以上蓄積出来なくなると爆発的に大気中に放出される。その現象は俗に臨界と呼ばれ、貴重な天然資源である魔力の満ちた鉱石の大損失に加え周囲の魔獣をより強く凶暴にしてしまう。

人間や動植物が浴びたとしても起こらない凶暴化現象の仕組みについてはいまだ解明されていないものの鉱脈の臨界は百害あって一利無しの為、魔晶石鉱脈は臨界を迎える直前に採掘を開始し魔力を失った晶石で溢れる魔力を吸い取らせるという手法で採掘されるのが常であった。

尤も凶暴な魔獣達のテリトリーであり国軍すら立ち入ることの難しい魔の森のさらに先、もし鉱脈があったとしても採掘作業など到底出来はしないため、溢れては臨界を繰り返し周囲の魔獣達の力を高めてしまうのを指をくわえて見ている事しか出来ない。王はまたそれが起きたのかと問うたがそれが希望的観測だという事はすぐに開かされた。

「いえ。魔力放射が確認された地点では今まで鉱脈と思しきものは確認されておりません。術院にも使いを出しましたが神殿と寸分違わぬ観測結果を出してありましたゆえ、間違いはございませんでしょう」

「ならば何だというのだ。もったいぶらずに早く申せ」

覚悟は出来ていっても言う様に王は先を促した。

「は、申し訳ございません。実はその一帯にはかねてより、黄金の

上位龍が営巢しているという報告がございました。私が愚考致しますに…此度の事は恐らく…」

「仔か……！」

老いた神官の言葉を遮って呟いたカムロン王は知らず執務机に両手を叩きつけて立ち上がった。重厚な黒檀の机が僅かに震える。怒りとも恐れともつかない感情で歪んだその面には神官と同じくにじみ出た汗が伝っていた。数瞬の硬直の後、口を開いた王に神官を揶揄していた時の余裕は微塵もない。

「よく知らせてくれた。民達には一切この事が漏れない様に緘口令を敷け！特に商人共と他国からの者には絶対に気取られるな。いづれ知れ渡る事になろうがそれは遅ければ遅い程良い。観測は続けよ。ラング」

「はっ」

ラングと呼ばれた、老神官を招き入れた壮年の男が剣帯を鳴らし一歩前に出る。彼もその表情は強張っているものの、自分を御す事にはなんとか成功していた。

「貴様は部隊を選抜して偵察を出せ。『遠耳』で逐次連絡を取れ」

「御意に。仔が真に生まれて居れば恐らく生きては帰らぬでしょう。失って問題となる貴族の子弟は除外いたします」

「うむ。…全て終わり次第再度会議を開く。……下がれ」

今後の対策を決め、男達が頭を垂れて退室すると同時にカムロン

は力無く椅子に座り込んだ。白くなるほどに力を込めて握った両手を見つめて彼は呟く。

「我が国内でよくも、神をも恐れぬ蜥蜴の化け物が…！神よ、我が王国にかかる苦難を何故与えられたのか…」

神智暦2707年。この日を境に大陸全土に及ぶ動乱の時代が始まることを予見した者は誰も居なかった。

第2話 新生（後書き）

以後主人公は特別な場合を除き翔ではなくディラックと呼びます。
今後は龍サイドと人間サイドで近隣の情勢や世界のあり方などを明らかにしていければと思います。誤字やご意見ご感想ありましたら気軽にコメント下さい。

母龍の名が決まって無かった事に今気がつきました。

第3話 親子龍の生活（上）（前書き）

今回少し短くなってしまいました。

第3話 親子龍の生活（上）

この地に人がつけた名は天剣山脈。その名の示すように数多の剣が天を指し示すが如く、鋭い峰の連なる急峻な山岳地帯である。その山々の一つ、魔の森に程近い山の中腹にディラック達親子の巣があった。

ディラックがこの地に生まれて早くも1年が経った。1つ1つが小さな砦ほどもある巨石群に囲まれた巨大洞穴に作られた巣の入り口で、ディラックは今は狩に出ている母に教えられた通り体内の膨大な魔力を制御する訓練に励んでいた。

この1年間で、ディラックは母龍——その名をアルヴィス——から様々な事を教わっていた。元来龍とは力もさることながらその知恵も高きものだが、気が遠くなるほどの永い時を彼らは生きる。生まれて1年も経たない仔としては些か異常と言える知識欲であり、遠い昔自らの幼かった頃を思い出してアルヴィスは内心不可思議に思っていた。しかし生まれた直後から高い力を感じたため、多い同属の中でも頭抜けて優れた龍となるのだろうかという疑問を母の誇りに変えて仔の問うままに多くを教えて来たのだった。

もっとも母は勿論知らない事であったが何もおかしいことなど無い。幼い龍ディラックの精神はその実人間の21歳の青年、翔であるのだから。その身を強力なドラゴンとした今も、肉体に引きずられ変化し続けているとは言え概ね人間の時の自我を残していた。知識は力であり、誤った選択をしない為には知識はより多く、より正しく蓄えるに越したことは無い。しかもここは自分が21年間過ごした中で蓄えた知識の多くは通用しない異世界となれば、必死になるのも当然であろう。

（母様が帰ってくるまでに、今日こそ何とか魔力の方向性を明確に絞れる様にしよう）

ディラックはその力こそ高かったが、一方で力を制御し、自らの意のままに操ることは壊滅的と言って良いほど苦手だった。

寝ている最中に夢の影響か、魔術の暴発で洞窟を焦がした事も一度や二度では無い。何の夢を見ているやら、まだ教わってもいない火術や雷術を無意識に発現し周囲に放ってしまうのだ。アルヴィスは既に成龍となって永く、魔力の制御など無意識下で働いている。寝ている最中として体の周りには常に術の防御膜を生み出しているため、仔の放つ制御出来ていない術が直撃しようがかすり傷ひとつ負わないが、洞窟内と巢の構造物はそうは行かない。母龍は何度もふもとの森から木や岩を運び、獲物として巢に運んだ大型の魔獣の皮を剥いでは巢の補修をしていた。

（母様は優しいから怒りはしないけど、こう何度も巢を爆破してしまうのはどうもなあ…。早く制御できるようにならないと一人前の龍にはなれない）

まるで人間がするように、ディラックは首を軽く振って途切れかけた精神集中を再開する。

たびたび巢を破壊する落第生に、アルヴィスは今他の知識に優先して魔力の制御を学ばせている。彼女が言うには、力を持て余し制御できない事は龍としてはとても恥ずべき事だということだ。幼い今でこそ咎められる事では無いが、もし成龍となっても出来ない様なら龍の矜持など持てはしないという。

ディラックはこの世界での母を落胆させたくは無かった。人であった頃の母親には、恨みこそしなかったが愛情を注いでもらった記憶は殆ど無い。その反動なのか、深い愛情と理解を示してくれる母、アルヴィスの期待に背くことは絶対にしたくないと考えていた。それに自身の理想であった気高き龍となるには、こんな所で躓いているなど言語道断である。愛情に応える事と自分の目標とが合わさり彼を日々修行に邁進させる原動力となっていた。

（心臓に意識を集中して：それぞれを満遍なく：）

魔術の能力は精神力と術構造の正確さ、魔力量によって決まる。体内に貯められた魔力を管理し、空間に精神で描く不可視の術式、いわゆる魔方陣を正確に構成し、その魔方陣に望むだけの魔力をコントロールしながら流し込む事で発動させる。この過程の何処が欠けていても正確に術を発動させる事は出来ない。体内魔力の管理が出来ていなければ無為に力を垂れ流すだけでなく敵手に気取られる事にもなり、又使用する魔力の操作が覚束なければ威力や方向を正確に定める事が出来ない。何より術式が不完全だった場合には暴発が起こり非常に危険となる。そうなった場合どんな効果が発揮されるかは予測できず、魔獣人族問わず少数ながら命を落とすものもあるという。

ディラックの場合は術式構成も精神力も未熟だったが、何よりもまず体内の魔力を管理出来ていなかった。当初は溢れる魔力を体内に固定することすら出来なかったため、今でも定位置である彼の寢床の下、ただの岩だった物がそれなりの密度を持つ魔晶石と化してしまった程だ。流石に今ではその様な事は無くなっていたが。

（頑丈なタンクを：バルブを固く閉じて：）

3つある龍の心臓に、ガソリンを入れる頑丈なタンクをイメージする。『心臓の位置に魔力を蓄え収めるものを想像する』という修行方法は種族を問わず有効とされている。アルヴィスは昔『強靱な蔓草と自らの翼で作られた囲い』をイメージして修行したと言っていたが、元現代人のディラックは可燃物を収める安全な容器としてガソリンタンクをイメージしていた。母にはありのまま説明するわけにもいかず、『石で出来た頑丈な容れ物』とだけ伝えているが。

可燃物とはもちろん魔力の事である。

（それぞれをパイプで繋いで：出口のバルブは固く閉めたまま3つを繋げる）

強固な容器が3つパイプでつながれ、その先のバルブでしっかりとせき止められているイメージが完成した。龍の体の恩恵か、彼の精神力は明確に物体の構造を心の中に生み出せるまで発達している。この半年の修行の成果かかなり精度が上がっており、ここまでは成功である。

（バルブを少しだけ開いて：）

今まさに調節を開始しようとしたその時、問題は起きた。

母龍アルヴィスが狩の獲物をつかんで巢の近くまで飛んで来ていることに、気配を察知して気づいてしまったのだ。薄く閉じられていた眼を無意識に開けた彼の視界に悠然とこちらに向かって滑空してくる母の姿が映った。その瞬間、わずかに集中が乱れた。

（母様が帰ってきた：あっ！）

予定していた放出量より遥かに大量の魔力が、視線の先の虚空、さらに先に居た母に向かって放射された。咄嗟に首を振って眼をそらしたものの、無色のエネルギーは母の翼を掠めて彼方に消えてゆく。ディラックは慌てて集中を取り戻し、強引に『バルブ』を固く閉じた。

『やれやれ……。私の姿を見ただけで集中を乱されるとはまだまだだよだな、未熟者よ。それほどに母が恋しかったか？』

苦笑とからかいの優しい念を送りつけながらゆっくり降下してくる母に、ディラックは恥ずかしくとても眼をあわせられないとばかりに顔を伏せて着地する場所を空ける為に後ずさる。力なく垂れ引きずられる尾が彼の落胆を如実に表していた。

（はあ：ゲームだと覚えたただけで完璧に使いこなせたけど、現実流石にそんなことないなあ：もっと修行しないと）

ようやく1歳を迎えたばかりのディラック。彼は一人前になるまでの遠い道のりを思い、こっそりとため息をつくのだった。

第3話 親子龍の生活（上）（後書き）

文量の調節が上手く行かず慣れるまでは増減が激しいかと思いますが、ご容赦ください。

第4話 親子龍の生活（下）（前書き）

予想を遥かに上回る人数の閲覧があつて嬉しいやら驚くやらで大変です。ありがとうございます。時間を見つけては書いておりますので、遅筆なのはどうかご容赦下さい。

第4話 親子龍の生活（下）

ディラックと母アルヴィスの暮らす洞穴の入り口には、辺りの巨石群と比べても一回り大きい巨大な岩がある。洞穴の開口部から大きく天に突き出したその岩はアルヴィスによってきれいに削り取られ、彼女が巢に入るための離着陸場として利用されていた。

その大岩に今日の獲物を置いてアルヴィスが着地すると、わずかにディラックの足元が震えた。母の体は小山の様な大きさで、体長は地球の単位で20mを優に超える。その体重がどれ程になるかは推して知るべしである。

『おかえりなさい：ごめんなさい、母様。まだ制御が甘くて、常に集中してないと駄目みたいです』

『ふふふ、我が姿を見て嬉しさから集中を緩めたと言っても咎めはせぬぞ、幼子よ』

悄然と肩を落としたディラックが出迎えたものの、アルヴィスは機嫌良く息子をからかい続ける。鼻屑目に見てもディラックはこの半年で格段の進歩を遂げていたし、何より誤って魔力の直撃を浴びたところで痛くも痒くも無いのだ。初めて生まれた我が仔のする事であり、成功こそ喜ぶが失態をことさら咎める様な真似をするつもりは彼女には無かった。

『大分良くなったものだよ、勤勉なる者よ。いずれは如何なる状態であっても制御を乱す事なき様にせねばならぬが：そなたの事だ、遠からず体得できよう。さあ餌を食べるとしよう』

そう励ましてアルヴィスは息子を巣の中へと促す。ディラックからすれば無意識に家を爆破したり親に爆炎を浴びせる子供はどのようなのだと悩むものの彼女は一顧だにしないようだ。

『今日は久方ぶりのクルバルだ。暢気に角鹿を追ひ回していた故、我が爪にかかってしまいおった』

巢の入り口に程近い、親子の『食事場』となっている辺りでアルヴィスは獲物のクルバルを解体する。クルバルとは大型の雑食性の魔獣で、ディラックから見れば『巨大なミノタウロスが蟹のごとき甲羅を着ている』様な生き物だ。知能はほぼ無く、雑食かつ暴食であるため人界では凶暴な害獣の代表格である。ディラックは人間の頃の意識をほぼそのまま保っているため、彼が知性のある存在を餌にする事に強い抵抗を訴えた事から母が知性ある魔獣の類を狩って来ることは殆ど無い。

アルヴィスは巨大な爪で器用にも固い甲殻を剥ぎ取り、鋭い牙で肉を引き裂くとその一塊をディラックの前に置く。魔術の鍛錬は精神力と共に体力も著しく奪う為、空腹ゆえか彼は無言で肉塊に牙を立てる。母はその尾が先ほどまでよりも力強く動いている様子を満足げに見やると自らも肉を咀嚼し始めた。巨体を維持するためか、ディラックの1食程の量が瞬く間に飲み込まれて消えていく。

『腹がくちくなくなったら、共に辺りを散策するでしょう。強き体躯を得る為には巢に籠って魔術を鍛えるだけでは不足であろう』

『はい、母様！』

妙に科学的な事を言う母に内心おかしさを覚えたディラックだったが、龍種は数万年以前より連綿とその知識を継承している。科学

的な裏づけなど無くとも結果が伴うなら知識としては十分であった。

（こんな風に生肉を食べることに、最初は抵抗感あったなあ…）

漠然とディラックは思いながら、鮮血滴る生肉を噛み千切る。口内に広がるまだ暖かい血と程よく脂肪の乗った赤身を彼はすこぶる美味と感じていたが、生まれた当初は内心かなりの抵抗を感じていた。人間の精神を内包しているのだから当然だが、生肉を食べる事以上に困惑したのは、その生肉を体は実に平然と受け入れ美味しく感じた事だった。見たことも無い怪物の生肉を心は反射的に拒絶するのに、アルヴィスの手前嫌がる事など出来るはずも無く食べてみると体は美味しい美味いと欲するのだ。龍の体に人間の心、それが実に乖離した物である事を実感した、最初の出来事だった。

（今でも少し抵抗感が残ってるけど、こんなに美味しい）

滴る血さえ啜る様に飲み込みながら、複雑な心境を抱える。最初はむせ返る程の血臭に吐き気すら覚えたものだった。尤も体は盛大にその血臭を待ちわびていたが。

最後の一口を音を立てて飲み込み母を見ると、既に食事を終えていた。ディラックにはまだ些かの無理があったが、アルヴィスは殆どの骨をそのまま噛み砕いて食べる為、ごく一部の骨と甲殻以外何も残っていない。満足げな様子でディラックを見ると、彼女は巨大な翼を揺らし立ち上がり洞穴の入り口に歩を進めた。

『さあ、今日は頂上まで行こう。そなたはまだ翼を扱えない故、脚を滑らさぬよう留意するのだぞ』

『はい、母様。これでも大分脚は強くなっただけですよ、大丈夫です』

睦まじく言葉を交わしながら親子は洞穴を出る。剣に喩えられる
険しい山とは言え、4本の逞しい脚に卓越したバランス感覚を持つ
龍にとっては平地を歩むのと大差はない。食後の軽い運動を兼ねて、
この山脈に関する逸話を話しながら2匹は巢の上にそびえる山肌を
歩いて行った。



夜。地球のものより僅かに大きい太陽が隠れると、山肌は星明か
りに満ちる。

銀に輝く調和と実りの月リグル、金に輝く闘争と武の月アルゴル。
二つの月光が妖しく輝きながら天頂を目指す時間になると、親子は
眠りの時間を迎える。アルヴィスは緩やかな弧を描いて横たわり、
その腹部にディラックは体を預けていた。

徐々に夢うつつとなる穏やかな時間の中でディラックは半年ほど
前の出来事を思い出していた。

（あの時はすこし自分の安直さに嫌になったな）

それはアルヴィスが餌を運んで巢に帰ってきた直後の事だった。その時も獲物はクルバルで、いつもの様に獲物を解体していた母は急に鎌首をもたげ、辺りを伺う様に眼を細めた。何も感じず訝しげな様子のディラックに構わず少しの間そうしていた彼女は何かを確信すると、ディラックが初めて聞く、低く腹の底に響く寧猛な憤怒の声を漏らした。

『そなた、此处より一步も動くでないぞ。我はすぐに戻る』

そう念話で告げた母は素早く身を翻して洞穴の入り口から飛び立った。説明も無く飛び出した彼女の命じた通りディラックが緊張しつつ座り込んで待っていると、程なく山のふもと、魔の森の方角から轟く怒りの咆哮が聞こえてきた。

（母様何があったんだろう？怒っている所を初めて見た）

普段は穏やかな母の豹変ぶりに身を固くするディラックの元に怒りの咆哮の直後、3度の爆音が聞こえた。微かだが魔力が煮え滾る気配と熱すら彼は感じた。

常のアルヴィスは、狩の時も魔術を行使することは殆ど無い。その爪と牙だけでは及ばない程の魔獣などこの近辺には居ないし、意味も無く森や山肌を焼き払い生物が暮らせない状態にしても良い事など無いと彼女は知っている為だ。その彼女が火術を行使し何者かを焼殺せんとしたとなれば、これは只事ではない。ディラックは母の無事を疑う事無く、しかし緊張を解く事も無く待ち続けた。

程なく、アルヴィスが巢の入口に戻ってきた。双眸は爛々と輝き、今だ全身から憤怒の気配が漏れ出ているものの、見た所傷一つなくディラックはそっと安堵した。

『一体何があったのですか？』

アルヴィスはよく見れば前足に何かを掴んでおり、腹立たしげにそれを放り出した。彼女の爪を離れた3つの黒い塊は床に落ちると、ぼろりと崩れていくつかの破片に変わる。彼女の逆鱗に触れた哀れな犠牲者達は、強力な火術で炭化するほどに焼かれていたのだ。

『姿を隠し気配を絶つ術を使って我らの巣を伺っておった人間共だ。大方そなたが生まれた事を知って探りを入れに来たのだろう』

『人間……！？』

驚きに目を剥いたディラックが炭化した塊を凝視すると、確かに元は人間の形をしていたと解った。見れば今だに煙を上げる炭の中に焼け焦げ中程から折れた刀剣らしきものも覗いている。突然の事に彼は混乱し、つい声を上げてしまった。

『母様、彼らは人間ですよ！何もここを探っていただけでこんな、こんな惨い殺し方を……！』

彼は人間だった頃も含めて人の死体を見るのは初めてだったし、今まで優しい面しか見せなかったアルヴィスの豹変を目の当たりにした事で気が動転していたのだ。しかしそんなディラックこそ、母からすれば異常な考え方だった。彼女は怒りの感情をディラックに叩きつけて言う。

『人間。人間だから何だと言うのだ、浅慮なる者よ！此処は我らの領域、我らの棲家だ。そなたには人間が如何なる物か、十分に教えただけだ。彼奴等は神に与えられた当然の権利と嘯き我等の地を奪

おうとする。その様な者共が我が家を探る時、手を下すのは当然の行いであろう。魔獣共は我を恐れて近寄らぬが、もしこやつらと同じ振る舞いをするならば、我もまた等しく行うだろう。何か我はおかしな事を言うたか』

母の言葉は至極正しいものだった。アルヴィスが語った知識によると、人間の大半が信仰している宗教の教義、すなわち彼等は大地を遍く従えるべく神に祝福されており、自ら以外の恩寵無き魔獣や亜人達を排斥する事は当然の権利と信じているという。彼女は知識の内容に自分の立場や見解から色づけする事は一切無い為、それは正しいのだろう。

同時に彼女は特別人間を嫌っている訳では無い。偶々今隆盛を誇っているだけであり、地に満ちる数多の種族の一つという認識でしか無いのだ。アルヴィスはけっして好戦的な性格では無く、敵対して来ない相手を殺し傷つけるのは、自然の摂理として食物にする時だけである。しかしもし敵対するものあれば、その時は圧倒的な力を以って殲滅する。魔獣の中にも龍を敵視する物は居る。知恵持つ魔獣の中には、龍の血肉は万物の真理をもたらすと信ずる物も居る。死霊共は相手が龍であろうとも見境無く敵対するだろう。人間が特別な敵と言う訳では無い。

大切な我が仔を守る巢に何らかの意図を持って侵入しようとする人間はテリトリーを侵し『敵対者』の範疇に入った。只それだけの事であり、彼女は何も間違っては居なかった。

『いえ……その、母様は何も間違った事をおっしゃってません。……ごめんなさい』

長い逡巡の間にディラックはそう思い至り、頭を垂れる。彼の本

来人間であつた心はそれに納得出来たとは言いがたかったものの、それと理屈を違える事は何とか踏みとどまった。それでも浮かない様子のディラックに、母は怒気を消し去って優しく声をかけた。

『優しき者よ、心持つ魔獣を餌とする事すら心底嫌がつたそなたの事だ。母が知恵ある者を簡単に殺してしまった事が悲しかったのであろう』

『……はい、母様』

項垂れたまま、顔を上げない我が仔に彼女は言葉を続ける。

『そなたは我が仔とは思えぬ程に優しすぎるくらいがある。優しき事は間違いではない。が、それも時と場合によるう。我等は傷付けられる事すら稀とは言え、その意思を持って爪牙向けられた時敵手を滅ぼすのは当然の行いだ。誇り高き龍となるならば、其処を間違えてはならぬ』

ディラックは複雑な顔をしていたが、母が思う所とその内実は違っていた。

彼は確かに知能を持つ魔獣を餌とする事を嫌ったが、それ以上に人間であつた精神が人間を殺す事を拒否したのだった。平和な日本に暮らしていた彼にとっては、敵対者とは言え人を殺す覚悟など当然無い。それだけの事である。それに食われる側から見れば知能の高低によつての区別など考えの浅いエゴでしかない。

『はい、母様。正しくあるよう、努めます』

母の言う事は正しく、問題があるならばそれはディラック自身の

出自と、精神の未熟さだった。安易にドラゴンになりたいなど願
い、それがどういう結果を引き起こすかには考えが至らなかった己
の未熟さを、彼が初めて痛感したのはこの時であった。

『理解したのであれば良い。聡明な仔よ。…人間は墓という、亡骸
を納める穴を作り死後そこに入るものだ。彼奴等は我に敵対したと
は言え既に命を支払った。亡骸は墓に収め大地に還してやろう』

今だ消沈している我が仔を見かねてか、アルヴィスは人間の風習
を教えその通りに彼等を葬る事を提案した。炭化した3人の亡骸を
片脚でひょいと掴み上げ、残り3本の脚で器用に巢の外の山肌へと
向かう。ディラックも共に出ると穴を掘り、遺体を並べるときれい
に土砂で埋めてやったのだった。

久方ぶりに食べたクルバルの味が思い起こさせたのか、ディラッ
クは苦々しく顔をしかめる。『人間と敵対する』という事に何の実
感も無かった頃の自分にである。

（後悔はしてないけど…本当に子供だったな。今もだけれど）

甘い考えしか持たず、龍の仔としては些か異常な自分はこの先折
り合いをつけて生きて行けるのだろうか。そんな思いに捕らわれて
いたディラックの体を、不意に金の翳りが覆う。傍目には寝てい
るとしか見えないアルヴィスが片翼を広げ、そっと彼を包んだのだ。

（……おいおい、自分の道を考えていこう）

まだまだ時間はあり、心身ともに成熟するのは遙か先の事だろう。
だが今は母の温もりに安堵したのか、彼はようやく眠りに向かい瞳
を閉じたのだった。

第4話 親子龍の生活（下）（後書き）

後半のエピソードを今回に入れるか迷った結果、時間がかかってしまいました。次回は少し軽い話になるかもです。

誤字はもちろん、ご意見ご批判などありましたら気軽にコメント頂けると嬉しいです。

第5話 異変（前書き）

読んでいただきありがとうございます。コメント頂けるのがこんなに嬉しい事だとは。

はやくも当初と文体がズレて来ている気がします…。

第5話 異変

（体が熱い。全身が苦しいし…息が詰まるようだ）

さらに半年程が経ったある日、ディラックは母の居ない巢の中でぐったりと横になっていた。数日前から何とはなしに気だるく熱っぽい状態が続いており、声音や身振りで気づいたアルヴィスも心配げな様子だったものの、今は居ない。魔の森の中に人間達が集団で入り込んでおりその様子を伺うとの事だった。手荒い真似は極力避けるように願ったところ『警告するだけだ。体調が優れぬのだから余計な気遣いをせずに休んでおれ。せぬとは思うが今日は鍛錬はやめよ。出来るだけ早く帰ってくる』と言って飛び立って行ってしまった。

（人間達が母様を怒らせるような事をしませんように…）

そう願いながらディラックは弱々しく体を揺らす。

猛暑が終わり、少し優しくなった太陽は天頂を少し回っている。少し前までは熱と湿気を孕んだ風が吹き込んでいた洞穴内も今は穏やかなものである。というのに、彼の体内は未だ夏のままだ如くに火照っていた。

龍は病にかかることはまず無い。風邪をひくことも無いし、既知の毒物はほぼ全て中和してしまう。アルヴィスも知らない強力な毒や病原体、龍の強靱な精神力と魔力をも退ける呪やものと思いましたが、彼女が1500年以上生きて来た中でそんなものは一度も無い様だった。

しかし彼は現に熱に浮かされている。午前中こそ微笑んで母を送り出せたものの、ここ数時間で熱は急上昇していた。

（なにか体中がミシミシ軋んでるぞ…これは本格的にまずいんじゃないか）

既に生まれた当初より2倍近く成長した黄金の体軀は日に日にその輝きを増していたが、今は不調を反映してかくすんで色褪せているようだ。そればかりか彼の聴覚には全身が立てる不協和音が体内から聞こえていた。

（母様にも解らないなんて…何の病気なんだ？ やつと魔力制御も上手く出来る様になってきたのに…。まさかこんなことで）

かからないはずの病気に、ディラックの脳裏に死の影がよぎる。彼は野生動物が些細な病気でも死んでしまうと聞いたことがあった。薬も治療法も知らないのだから当然だろう。アルヴィスならば治癒術も当然扱えるが、治癒術では風邪や病にはさほど効果が無い。失った体組織や血液を再生し、魔力を体力に変換し、毒物を分解して重症のものを癒すことは出来る。母の力量を持つてすれば恐らくは死の淵に立つ程の傷すら癒せるだろう。だが風邪や病には直接的効果を与える術が存在しない。戦いを除けばこの時代、術能力を持つ種族の死因の大半が病であった。

（やっぱり龍の体に人間の魂は無理があったのか…？）

アルヴィスが少しでも熱が治まるようにと残していった氷塊を力無く舐めながらディラックは思う。病を知らぬはずの龍の肉体が病に冒されるのは、内包する脆弱な人間の魂によるものでは無いかと朦朧しながらも考えて居ると、轟と大気を裂いて母龍が洞窟の入り

口に降り立った。

『人間共は家畜を食い荒らした魔獣を追って迷い込んでしまっただけであった故、人里に続く沢を辿るよう教え追い返した。よく熟れた果実を取って来た、少しは食べ：そなた！？』

たわわに実った桃色の果実を枝ごと啜えて帰って来たアルヴィスは、巢に横たわるディラックを一目見た途端、果実を放り出して駆け寄った。傍目にも解るほど、出立した時と比べディラックは衰弱しきっていたのだ。

『母様：お帰りなさい：』

『動くな！横になっておれ：！？』

弱々しく震えながらも健気に半身をもたげた息子を彼女は慌てて止める。初めてディラックの前で焦りを見せた母の前で、それは起きた。

『え？』

ぱきり、ぱきりとひび割れる微かな音を立てて、ディラックの右前脚から肩部にかけての鱗が、落ちた。

『うわっ：わっ：！』

眼を見開いて静止するアルヴィスと驚愕と恐怖に身をよじるディラック。体を捻った衝撃に耐えられなかったのか右翼と首筋、左後脚の鱗までもがバラバラに剥離してゆく。悲鳴のような鳴き声を上げる本人をよそに無情にも残りの部位からも次々と表皮と鱗が剥げ

落ちて行った。

『…!!』

もはや悲鳴すらも漏れることは無かった。絶句した鋭角の顔面が真つ二つに割れ、左右に剥がれて巢の床に落ちる。その下から現れたのは——真新しい、艶めく黄金の鱗だった。

『…………脱皮だ』

『…………え?』

しばしの硬直の後ディラックが首を回して全身を眺めると、そこには褪せて落ちた鱗とはまったく違う、鮮やかに光を反射する全身があった。力を込めて体を伸ばせば、僅かに残ったくすんだ鱗が落ちてさらに輝きを増す。それだけでなく、今までは尖った鱗でしかなかった翼の付け根部分にはアルヴィスと同じように小さなもう一對の翼が生えており、力を込めると機敏に動いた。命の危機すら感じた熱は一切無く、嘘の様に体は軽かった。

『…驚かしおって、まったく手のかかる仔よ…! 只の脱皮と知っていればこれほど心配せなんだものを…』

ほっと脱力した念話を寄越す母を見れば、彼女はくたりと全身を横にしていた。息子の異常事態にそれほどまでに緊張したのだろう。初めての仔なのだからその心配もひとしおである。

『私も驚きましたよ…でも母様も当然、脱皮はなさったんですよね…?』

とは言え、ディラックが責める様な半眼を送るのもせん無き事である。命の危険まで感じた不調が只の脱皮だったのだ。母龍から生まれた以上、同じ経験が無かった筈はない。

『：我の場合は僅かなむず痒さを感じただけだ。恐らく父祖もそうであつたろう。そなたの場合は並外れて急激に成長したため、肉体が急ぎ脱皮の準備をした反動であろうな：その可能性には思い至らなかった』

言われてディラックはさもありなんと納得した。アルヴィスが言うには、彼は明らかに自分の時よりも成長が早いという事だった。人一倍高い速度での成長に代謝サイクルが負い付こうとした為の発熱だったのだろう。正確には覚えてないものの、自分の初脱皮は生後2年はどうに過ぎていたと語っていたアルヴィスはあることに気がついた。

『おや、そなた少し趣きが変わつたな。伸び行く者よ、体の端々が紅玉の様に輝いて居るぞ』

『え？』

そう告げられるまで気が付かなかったディラックが全身を検分すると、脱皮する前は金一色だった筈だが、確かに尖った鱗の先端や一回り大きくなった様に感じる翼の端など何箇所かがルビーの様な鮮やかな紅に染まっていた。

『本当だ：これはこれで綺麗です。でも母様とは違ってしまえますね』

『そなたの父も黄金一色であつたな。しかし、そなたから見て祖父

母に当たる御方までそうかは知らぬからな、父には顕れ無かっただけなのかも知れぬよ』

龍がつがいで暮らすという事はあまり無い。その上父は常に新しい見聞を広めに向かう性質の龍だったらしく、ディラックが生まれる前に別の大陸に渡ると言って飛び去ってしまったと教わっていた。遺伝子の仕組みこそ知らないが、先祖の特性が子に伝わる事は理解しているアルヴィスは気にする事は無いと教えてやる。彼女からすれば外見の色の变化など個性に過ぎない。人間の感覚にすれば鼻が高いとか眉が濃いと言う様な物である。肝要な事は魂である事を、母龍は正しく理解していた。

『安心するが良い、見た目が変わった所でそなたは我が仔だ。それに中々に美しい色合いぞ。：どれ、体も軽くなったのであろう。脱皮を終えたのだ、果実を食べ、その後存分に翼を伸ばしに行こう』

『はい、母様！』

僅かに不安そうな表情を見せる我が仔にアルヴィスは微笑むと、先ほど取り落とした果実の枝を眼の前に置いてディラックの顔を舐めた。ぱっと不安の色も消え嬉しげに目を細めたディラックは瞬く間に大振りな実を平らげると、脱皮前よりも軽やかに洞穴を駆け抜け、山肌に飛び出して行く。

(：ふふ、そなたと我が仔は日を追う毎に強く美しく育っておる)

アルヴィスは僅かに首をもたげ、今頃何処かの空を翔んで居るであろう雄々しきつがいの事に思いを馳せた後、我が仔の後を追いついていった。

第5話 異変（後書き）

というわけで脱皮の話でした。

落差や緩急をつけられる様今後とも研究して行きたいと思ひます。
誤字、ご批判ご意見ありましたら気軽にコメント下さい。

第6話 為政者（上）（前書き）

結構時間が空いてしまい申し訳ないです。

第6話 為政者（上）

ザーム王国首都ラクトザーム。人口約13万人を擁し今も緩やかに拡大を続けるこの都市は、ラクトザーム王城を中心に幾重もの城壁に年輪の如く覆われており、王城から離れる程暮らしが貧しくなる典型的な城塞都市である。今や7重にまで広がった城壁は其処に住む者の王家にとっての重要度を表すかの如く徐々に低くなり、中心部の堅固な守りの内側には貴族や神官が、最外縁の土で形作られた貧相な城壁のさらに外側は貧民街となって亜人が多く暮らしている。

もつとも神智暦後に勃興した無数の国家の内でも最後に誕生したこの王国は、その成立以降一度も大規模戦乱を経験していない。建国当初こそ国境線付近を北方に存在する大国『神聖帝国ヴェゴニア』によって侵略されたものの、和平通商協定締結以後は大きな諍いも無くここ80年間は内政の安定及び南と西に広がる魔獣の地の開拓に専念している。増えていく城壁は外敵に対する備えというより其処に暮らす者達の生活領域を明示的に分ける事にこそ意味があると言えよう。雇用増進の側面をも持つ城壁建設はまさにザーム王国の年輪であった。

このウルヴァーンと呼ばれる大陸において最南端にあるザーム王国にとって、南と西の未開地帯は人界の限界点であり、また未来の豊かな国土そのものであった。切り開き、開墾し、鉱物資源を採掘する。開拓の前線基地はそのまま村となり、やがて周囲が安全になり収益が増えると共に町となる。そうやって建国以来次々と森を切り開き魔獣達を退けて国を富ませて来たザーム王国の前に14年前、突如として立ち上がったものがあった。

南から南西にかけて長々と横たわる『ヘテ・ルブス大森林』通称『魔の森』、国土の西部に存在する巨大な湿地帯『トートンの泥濘』、そして其処に棲む強力な魔獣達である。意気揚々と森を切り開き魔獣を追い散らして来た開拓者達は、今までの森が神の加護すらある程の穏やかな林でしか無かった事によりやく思い至った。

死の魔人トートンの名を与えられた巨大な沼地は歩く事もままならない泥沼とねじくれた木々、その間から襲い来る魔獣によって1日に2バスメルテ（1バスメルテは約500m）も行軍出来ず、術でも癒せぬ瘴気で次々と死者を生み、その屍は死霊の手に堕ち蛆の湧いた屍食鬼と化してかつての同胞を襲った。

魔の森に至ってはいかなる作用か方角を知る術法針が機能せず、陽も指さぬ程の樹海の中で方角を知る事すら出来ない人間達を強大な魔獣が虐殺した。トートンの魔獣すら人の手には余るというのに、魔の森の魔獣は数種が人と同じかそれ以上の智恵を持つのだ。術を自在に操り獣の本能では無く技術を持って戦う彼等に、移動する事すら覚束ない人間達が敵う道理は無かった。とどめとばかりに数年前からは黄金の龍が森の更に奥に棲む様になった。

かくしてこの十年以上、ザーム王国の国土拡大政策は完全に頓挫している。

領主達に恩賞を提示して開拓を奨励し、前線基地となる村々には補助金を与える事によって伸るか反るかの開拓事業に命を投げ出す貧民達を効率良く使いザームは国力を増していた。治安の一時的な低下にも目を瞑り、他国の戦乱や貧困によって住む地すら失った者達を積極的に国内に招き入れて来たのもそのためであり、開墾の力仕事や魔獣との戦いで盾になる亜人奴隷を大量に仕入れては開拓者に安く提供することすら国家事業としていた。そうして国力や兵力

で劣るザームは、開拓地より得た農産物や鉱物資源を元手に政治面で大国と渡り合い平和を保って来た。つまり所、ザーム王国の政治・行政・経済は開拓を続ける事が前提にあったのだ。

今ザーム王国は経済的成長がほとんど停止しているにも関わらず、人口は緩やかに増加し続けている。農民は農地が増えず子に農地を分け与える事によって貧しくなり、鉱山経営者は拡大が見込めずに損益を出し始めていた。当然最初に割りを食うのはつるはしを握る者達だ。商人は情勢に敏感な他国商人との取引で敬遠される様になり店をたたむ者も少なくない。それに伴って都市部では治安も悪化し、貧困層に落ちた人間は犯罪を犯すか無謀な開拓に乗り出しては屍を晒した。

一部の貴族の間では、このままでは最悪後10年もしない内に完全に国家としての体を失うとまで囁かれている今日。開拓に依存し切ったザーム王国は、その失速と共に急速に国力を失いつつあった。



「ラング近衛騎士団長、御入室！」 「フィーラー宰相、御入室！」

次々と王国の政に携わる者達が議事堂へと足を踏み入れる様子を、ラクトザーム城の主、カムロンIIフォルニアスIIエスIIザーム国王は不機嫌そうに見つめていた。魔の森と恐れられるヘテ・ルブス大

森林の開拓に止めを刺した龍の仔誕生以後の3年弱で、政務の疲れと加齢によって王の容貌はさらに衰え、幾つかの皺と弛みが追加されている。

「ゼフォン王太子殿下、御入室！セフィーア王女殿下、御入室！」

衛兵が一段と張り上げた声に、カムロン王は僅かに顎を持ち上げて大扉の方に視線を投じた。精悍さと生真面目さを滲ませる青年と気高さ故の気の強さを感じさせる少女は、小さく目礼を返してくる。

共に見事な金髪を波打たせた2人は王が壮年期になってから授かった子で、母親は違えどそれぞれ国の行く末を憂い若くして政治の場に於いて尽力していた。彼が最も寵する家臣であり、愛する我が子でもあった。貴族達には厳格と評される王も、息子達を見る瞳には優しい光が宿る。

「…これより定例御前議会を開会致します。国王陛下」

全ての椅子が埋まると厳かな口調で宰相フィーラーが宣言する。骨ばった老宰相に続いて全員が立ち上がり、最上段の玉座に位置するカムロンに向かって心臓に右拳を打ち付け腰を深く折る神智教式の礼を取った。それに対して王も軽く左胸と額に手をやり答礼する。

「では、報告ある者は述べよ」

「は。では私から。既にお聞き及びかと存じますが、今から半月前、冬の2月11日に『オージスの槌鉾』開拓団がトートン湿地帯にて全滅。さらに同月20日『第17次ルブス開拓隊』がヘテ・ルブス大森林にて壊滅致しました。こちらに関してはまだ日が浅い為情報が足りませぬが生存者の言によりますとヴァンリーの縄張りに侵入

した為とか」

重い空気の中まず口火を切ったのはフィーラー宰相の補佐官だった。オージスの槌鉾と名乗る開拓者達は商人や傭兵が募った民間の開拓者団、一方の第17次ルブス開拓隊はルブス領主が公的に募ったものである。どちらも少人数では無く、錬度の程はさておいても100人を下らぬ戦闘員を擁していたはずだ。

ちなみにウルヴァーンの暦は地球での3月頃から始まり、1年が13ヶ月、1ヶ月26日で3ヶ月毎に春夏秋冬に分けられる。最後の一月は創造の月と呼ばれ世界の創造を祝う祭りが盛大に行われこの間は戦争すらも停止されるのが常であった。冬の2月は真冬ではあるものの、ザーム王国は大陸南部に位置するため降雪も無く過ごしやすい。重武装のまま長時間の移動を強いられる者にとってはむしろ最も戦い易い季節である。

「オージスの槌鉾は魔獣及び屍食鬼化した団員との交戦で非戦闘員共々ほぼ全員が死亡しました。生きてこの情報を伝えた者も先日息を引き取っております。ルブスの開拓隊はヴァンリーとの交戦で戦闘員の過半数を損失した後、撤退中に複数のクルバルによる襲撃でさらに損失を出したと報告されています。こちらは非戦闘員は大半が生き残った様です。尤も物資の大半は大森林に遺棄せざるを得なかったようですが…。詳しい報告は現在早馬がこちらに向かっています故、それを待つべきでしょう。私からは以上であります」

ヴァンリーとは半人半蛇の魔獣で全身を強靱な鱗で鎧う、知能も高く術をも自在に操る強力な魔獣である。数家族が群れて暮らし、縄張りを荒らす相手には容赦しない。弓や土術で強化された石の剣等を用い戦術的に敵を狩る、クルバルよりも遥かに強力な存在だ。

つまりはどちらも壊滅、今年最後となる2つの大規模開拓団は見事にその能力を失ったという訳だ。報告を終えた補佐官は王の顔色を伺う様にちらりとその顔を盗み見たものの、理不尽な怒りが彼に降り注ぐ事は無く彼は息をついて着席した。

「百人単位の戦力では無駄だと解りきっていたものを……。ルブスのビクリスめも学ばぬ奴だ。功を焦るのも大概にしてもらわんと、無駄な損失が出るだけよ」

王が罵る様に呼んだビクリスとは、ルブスに封ぜられている領主である。半年程前にも開拓団の派遣を控え資金と人間を蓄える様に下知したばかりだというのにこの有様だ。オージスの槌鉾側は鉾石商人達が共同出資で集めた者達だったと報告されている。恐らく競合する相手が居ない今を狙い起死回生の大開拓団を形成したのであるが、今頃その商人達は夜逃げしているか身投げしているかのどちらかであろう。『方策を用意するためそれまでは資金人員を温存せよ』と数回布告しているものの、抜け駆けを狙う者は絶えなかった。

「やはり、これ以上の無駄な損失は看過できません、陛下。南部諸侯が既得権益にしがみついておったせいで援助金の打ち切りにも手間取り、もう猶予は無いのです。何か抜本的に対策を考える他ありません」

「私もファイラー殿に賛成であります。失業率も上がる一方ですし、開拓事業は完全に頓挫しております。近衛騎士団投入を叫ぶ声も高まっておりますが、何分実戦経験は一部の者しかございません」

ファイラーとラングが揃って声を上げるものの、具体案を示すには及ばない。ラング配下の騎士たちは近衛騎士団とは名乗っているも

の、この国唯一の職業軍人である彼等も人界に来る下位魔獣との戦闘しか経験が無く、人数も3000人弱と戦力としては最低限。都市部の警備と国境の維持に配備されている者達を動かせば国そのものも危ういのだ。簡単に投入出来るものではない。

「騎士団全てを動かせば恐らくは…」その間誰がヴェゴニアやアルトネーとの国境線を守るというのだ！」「森林を焼き払いながら推し進めれば戦力は少なくとも…」「魔獣共が溢れてきよるぞ」「やはり開拓事業は完全に放棄する他…」「我が家も開拓事業に資産を賭けていたというのに…」」

下座に座る幾人かの大臣や文官達が次々と口を開くが現実的とは程遠く、自分の損失に言及する者すら居る始末。王は苛立ちを肘掛にぶつけるかのように腕を持ち上げ叩き付けようとした。

その時、声が響いた。

第6話 為政者（上）（後書き）

一気に登場人物が増えて処理が追いつかず変な文章になっているかも知れません。会話と説明を無理なく盛り込むのがこんなに難しいとは。

誤字はもちろん、批判やご意見ありましたら気軽にコメントお願いします。

第7話 為政者（下）（前書き）

前話の時点で殆ど完成していたので今回は早く上げれて一安心です。人間サイドをあまり無能には見せたく無いのですが…どう見ても無能ですね。

第7話 為政者（下）

「静まりなさい！父上…いえ、国王陛下。発言してもよろしいでしょうか？」

王の振り上げた拳を止め、凜然と響き渡った声の主は愛娘セフィアだった。

「ふむ…何か思いついた事があるのか、セフィ」

王は顰めていた顔を一気に弛緩させ穏やかな表情で娘の発言を許す。

「はい。この者達は今すぐに問題を解決しようとしていますが、それは愚かしい事だと言えましょう。事業の頓挫から早10年以上、これまで大した方策も打ち出せなかったからこそ此処まで事態は悪化したと言うのに、今更慌てるとは見苦しいわ」

ほっそりとした面に切れ長の目と柔らかな唇、それを豊かな金の巻き毛で飾ったこの少女は、外見だけならば白百合の如き可憐さを備えていた。国民、特に男性に非常に人気がある事も頷けよう。だが今は傲然と蔑む視線を辺りに振りまいている。

「そうはおっしゃられますが王女殿下、何か良いお考えでも御座いますかな…？」

愚かだ見苦しいと罵られた大臣の一人が苦虫を噛み潰したかの様に眉を顰めて問うた。国王の手前これ以上表情には出さないものの、「陛下の娘というだけの世間知らずが何を言う」と思っている事は

想像に難くない。彼は日頃から王女に対しては否定的な立場を取っている。

だがセフィーアは鼻を鳴らすと彼を無視して続けた。

「私の提案はこうです。全ての開拓事業関連の資金を引き上げ、これを徴兵と訓練に充てます。特に貧困層から兵士を大々的に募集し、指揮官には騎士団の者達と貴族から選出した者を置きますわ。時間は数年かかるかと思いますが、こうすれば貧民達も職にありつけ、軍の力も増大しましょう？　そうして準備が整ったのち、南部か西部、どちらでも構いませんが完全に魔獣共を滅ぼしてしまうのです！」

力強く言い放った王女の提案は確かに魔獣を殲滅する事にかけては勝算があるかもしれない。だがそれだけでは足りないと言った騎士団長ラングが口を開く。

「しかし王女殿下、その数年間で我が国は大きく傾きましよう。すでに他国の商人や密偵を通じて我が国に龍が2匹棲み付いた事も広く知られており、手を引く者も多く居ります。決戦の時まで国が持ちましようか？」

「良い案が他に無いのなら、いずれにしろ遠からず国は傾くわ。我が国から得られる利益に見込みが無くなれば、アルトネーはともかくもヴェゴニアめは確実に触手を伸ばしてくるもの。悔しいけれど全面戦争となれば絶対に勝ち目が無い事はそなたが一番良く知っているはずよ？　ラング」

「むう…」

畳み掛ける様に返すセフィーアに騎士団長は返す言葉もなく押し黙

る。

「である以上、兵士を急激に増員する事で帝国に対する牽制にもなりましょう。今開拓関連の援助金はかなりの額と聞いておりますが、このままでは豚に与えているのと変わりありませんわ。ならば有効に活用すればよろしいのです。如何でしょう？」

言い放ってセフィーアが席に着いた時には、議会の大勢は賛成に傾きつつあった。碌な方策も無かった彼等は王女の発案に簡単に乗り気になってしまったのだ。

「……確かに、表向きは龍退治の為にすれば軍備拡大は十分可能ですな…最低限の訓練に時間はかかりますが」

「景気に関しては先行き不透明な現状よりも上向く可能性もありましょう。犯罪対策にもなりますし…海運業と内需拡大に努めれば十分持つやもしれませぬな」

武官と文官を統べるラングとフィーラーが賛意を表明したことで、一気に流れが決まりつつあった。だが此処に来て立ち上がったのはこれまで押し黙って聞き手に回り続けていたゼフォン王太子である。

「待ってくれ諸君。私は反対だ。陛下、発言しても？」

あまり似ているとは言えないセフィーアと違い、眉目秀麗なこの王子はカムロン王から蓄積した年月を奪えば瓜二つだろうと思わせる。彼はセフィーアとは反対に女性国民に人気の高いその美貌を不満げにしかめたまま玉座を仰ぎ見た。

「…余もセフィーアの提案に不満は無いのだが…何か問題があるか

？申してみよ」

王は不思議そうな顔をしつつもゼフォンを促した。

「はい。ラング殿や情報担当武官の諸氏は知っておられると思うが、この場で一度も報告されていない事件があります」

そう言ってゼフォンが騎士団長や武官達の顔を順に見渡すと、情報武官達はそっと目を逸らした。ラングは平然と顔を上げたままだったが。

「ほう、その事件とは」

「はい。半年程前、ルブス南方の村ラトの家畜が度々魔獣の餌にされていた様です。このままでは家畜が全滅してしまうと、村の男達は有り合わせの武装で魔獣と戦い、負傷者を出しつつも撃退に成功したとか。：問題はここからです。若い男達は血気に逸ったか、逃げた群れを追って魔の森に入り込み迷ってしまったのです。知っての通り、魔の森は人を用意に迷わせます。彼等は一昼夜の間迷い続け、森の奥深くに立ち入ってしまったのです」

「ふむ：確かにその事は確かに知らぬな。だがそれだけでは報告が無かった理由にもならぬと思うが。大体村の男達が死んでしまっはラトは立ち行くまい」

カムロンは責める様に武官達を睨みつけながらも先を促す。王の怒りを覚悟して武官達はうろたえ、祈るように王太子を伺った。

「御察しの通り、事件はここで終わりではありません。：幸運にも強力な魔獣にこそ遭遇しなかったようですが、彼等は森の奥深くで

立ち往生し、死を覚悟致しました。だがそこに：黄金の巨龍が降り立ったと言うのです」

「何？」

「彼等は恐れ戦きながらも、言葉が通ずると知り必死で自分達に起こったことを説明しました。ここからが肝要です。今にも龍の吐息で焼き殺されると覚悟した彼等に、龍は驚くべきことに人里に続く小川の存在とその位置を示唆し、高い木に生った果物を幾つか渡すと危害を加える事なく去ったというのです。彼等はその後、程なく見つけた小川を辿り無事にラトに帰り着きました。3名の重傷者が出たようですが、これはいずれも龍の手によってではなく家畜を荒らす低級な魔獣の被害であり、最後の報告書によると負傷した者達も今は農具を持てるまで回復したとの事です。：以上がその事件の顛末です」

その事件こそ、脱皮の苦痛にディラックが襲われていた日、アルヴィスが追い返したという人間達の事であった。

王太子の報告に議事堂はざわついた。知っていた者達は視線を彷徨わせ、知らなかった者達はこの事態をどう解釈するべきか、そして報告を怠った者達の責任を声高に迫及した。だがそこにゼフォンの興味は無い。

「此度の事、その責任については私が申し上げることとはごさいませぬ。私が申し上げたい事は、黄金龍がけっして相容れない不倶戴天の敵とは言えないということです。彼等は伝説の通り、恐るべき力と共に深き叡智をも備えているということなのです。龍だけではなく、ヴァンリー達もです。確かに彼等知能ある高等な魔獣は縄張りを侵し、危害を加えんとした相手には容赦しないでしょう。だが使

節を派遣し対話を持つことが叶えば、数千の兵士をむざむざ死地に追いやる事は無いのでは。如何でしょうか」

セフィア王女の発案に傾いていた重鎮達の意味はこの情報によって揺れた。彼等も為政者としての立場がある。兵士達を死なせたくない、などという考えではない。確かに戦って勝利できれば後顧の憂いは絶たれるだろうが、国を挙げて兵士を集め鍛え上げる程の資金と鍛えた兵そのものを大量に失い、もしも龍と魔獣達に敗れる事があれば、それはザームにとって立ち直れない痛手となるだろう。もし龍と交渉する事が出来るならば、一切を失う事は無い。騎士団長と宰相、そして国王も脳裏の天秤を慎重に推し量ろうとした。

しかしセフィア王女はその様には考えなかった。

「何をおっしゃられますか、兄上！敬虔なるオージスの使徒たる我等の子が蜥蜴の化け物に頭を下げるともおっしゃるつもりか！？」

叩きつけるが如くゼフォンに反論する彼女の瞳には、誇りと傲慢に隠れわずかに狂信の色さえ見えた。

「何も頭を下げるとは言っておらぬ！対話による解決を捨てるなど言っておるのだ。臣民の命を無為に失う事こそ主神の御心に逆らうのではないか？伝承の中には龍の知恵を借りた王国が偉大な繁栄を築いたと伝えるものもあるのだ。彼等龍族が我等と同等の心を持つ可能性は十分にある」

ゼフォンは確かに腹違いの妹を愛してはいたが、危ういまでに神智教の教えに純粹である事を常々危惧していた。彼にとっては教義とは指針であり教養に過ぎない。民がそれを熱心に信ずる事を咎め

はしないが、為政者までが同じく盲目になる事は良しとしなかった。為政者は常に柔軟に最善の道を選ぶべきであり、神智教団の教えは必ずしもそれに先行しない。これが彼の哲学であり、当時としては異端視される程の先進的な考えであった。

間違いなく、ゼフォン王太子には名君となる素質が十二分に備わっていた。

「兄上のおっしゃる伝承とは、土着の異教の言い伝えに他ならない！魔獣共は主神の祝福無き呪われた種族に他なりません。仮に知恵があったとしても主神オージスに放逐された者どもと交渉するなどと、神官達が聞けばひどく嘆かれましょう。何よりその様なことをなさり、もし教団より破門されては民心は離れそれこそ王国は瓦解しますわ！」

「何を言うかセフィよ！教義の違いこそあれ、伝承とは歴史に他ならぬ。そもそも…」

どちらに付くべきかと戸惑う家臣達をよそに、その後も兄妹は激しく議論を戦わせた。ラングは腕を組み瞑目し、フィーラーは注意深く両者の言葉に耳を傾けている。

カムロン王と言えば、もはや実質2人だけの会議となった議事堂を見渡しながら、皺を深くしていた。彼自身はゼフォン程柔軟な思考は難しいもののセフィーラ程には教義に縛られてはいない。自国内で幅を利かせる神官達を苦々しく思いぞんざいに扱える程には、彼は自由だった。とは言え、国教でもあるオージス神智教の禁忌に抵触する事によって起きる様々な弊害を無視する事は国王としても難しい。この難題の一因、龍を呪いながらも彼は深く悩み続けた。

ゼフォンとセフィアの討論は半刻にも及んだ。幾度かラングやフィーラー、数人の大臣達が意見を述べるもの一向に決着を見ず、残りの者達は諦めたように王の裁断を待っているばかりである。

情けない臣下の様子に怒りを覚えたものの、嘆息するとカムロン王はパンパンと手を叩き論争に終止符を打った。彼の心は自分でも気がつかぬ間にある欲望に衝き動かされ始めていた。

「良い。もう良い、2人とも。そなたらの見解は良くわかった。……この事案に結論を下す」

「はっ」「はい、陛下」

議事堂の全員が玉座を仰ぎ見る。彼は厳かに口を開いた。

「……余の結論はこうだ。……大綱としてはセフィアの提言を採用し、開拓事業の資金を引き上げ徴兵にまわす。目標は5年以内。その間は海運に注力して景気の低迷を抑える。戦力増強は魔獣殲滅作戦の為、神に捧げる神聖な戦の準備だと内外に有形無形の宣伝が必要になるであろう。騎士団からは教官向きの人材を引き抜かせてもらうぞ、ラング。ヴェゴニアの様に術院より教官を招聘し兵士達に攻撃魔術の教練もさせなければな。さらに……」

「父上……!」

国王の決断にゼフォンが抑えきれず口を挟んだが、彼は鷹揚に手を振ってそれを遮った。

「解っておる、ゼフォンよ。……詳細は追ってつめる。そして準備が整いし後、秘密裏に魔獣や龍との交渉を行う。首尾良く行けば龍共

を改宗させ配下に置いたなどと適当に言い訳は立つ。さすれば鍛えた強固な槍は領土外に向ければ良い：龍を支配下に置き多数の兵士を擁すれば軍事力でも引けを取らぬ大国となろう。決裂すれば事前の予定通り正面から戦って奪い取ればいい。何事も無かったかのようにな。何も奴等めも不死身では無い、過去に龍を滅ぼした王はいるのだ。多数の雑兵で押しつつみ弩砲や術で攻めれば勝機は存分にある。…交渉の事は事前に察知されてはならぬぞ。もしも教団より異端者の烙印を押されては、ザームは終わりだ。そうはならぬ様徹底しなければな」

今度はセフィアが驚き、咎める様に父を見たが口は開かなかった。

「いずれにせよトートンの平定においても戦力は必要だ。豊かな領土を持ったならば次の敵は内陸の大国だ。内地の巨獣共にむしり取られぬよう兵を備えるに越したことは無かろう。目の前に飢えた獣の顎が開いて居るとなれば軍事力の強化は必然だったのだ、我が国として交易だけでは身を守れぬよ。どうかな」

カムロンはうまく両意見を取り入れ名案を考え付いたとばかりに得意げに大臣達を見渡した。もっとも彼とて龍の懐柔が成功すると樂觀視する程甘い見通しは持っているわけでは無かった。ただ：万が一交渉に成功すれば龍をも改宗させた名王として、戦って龍を下せば英雄たる王として、自分は歴史に名を残すだろう。さしたる功績も無く先王より玉座を継いだだけの老いた王の心に、その欲望は甘美な美酒の如く染込みたやすく支配した。

どうかと問う口調とは裏腹に反論を許さぬ王の言葉に、数人は得心しかねていたものの最後は皆揃って頭を下げた。

この王の采配がザーム王国に如何なる未来を導き出すのか。まだ、

誰も図り知ることは出来ない。

第7話 為政者（下）（後書き）

閲覧して下さっている方の人数にちょっとビビり始めました…。
本当にありがとうございます。

前回に続いて大分文体が変な予感があります。批判やご意見ありましたらコメントいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515q/>

龍神記

2011年3月2日20時21分発行